

會學濟經學大國帝都京 叢論濟經

號二第

卷十二第

行發日一月二年四十正大

論叢

相續税の能力原則上の弱點……………法學博士 神戸 正雄

社會學と現象學……………文學博士 米田 庄太郎

倫理と經濟との關係……………法學博士 財部 靜治

時論

支那の社會の固定性……………文學博士 矢野 仁一

小作問題と朝鮮の小作制……………法學博士 河田 嗣郎

說苑

貨幣の對内及び對外價値の變動と貿易並ひに爲替との關係を論ず……………經濟學士 谷口 吉彦

雜錄

再び西陣の機業仲間について……………經濟學博士 本庄 榮治郎

海運同盟の研究に關する……………法學士 小島 昌太郎

社會學と現象學 (一)

(フッサールの現象學) (一)

米田庄太郎

緒言

昨年本雜誌に於て公にせる拙稿「フイアカントの社會學論」中に述べし如く、同氏の如きは同氏の社會學は大なる部分に於て社會の現象學であると言はれ、又タールドやヅュルケムの社會學に於ても其の根本的に重要な思想は、現象學的方法によりて到達されたものであるとさへ云はれて居る。此の如く今日獨逸の社會學者間にありては現象學を重要視し、其の方法によりて社會學の新しき發達を圖らんとする傾向の現はれ來れると同時に、又現象學者間にありても其の方法の適用を社會及び文化の研究に擴張して、以て新しき社會學及び文化學を建設せんとする人々が續々現はれて來た。されば社會學と現象學との關係を考察することは、今日の社會學に於ける重要な一問題であると思はれるので、余は本論文に於て少しく此の問題を論究して見たいと思ふ。

余の知る處では、現象學者中今日までに社會及び文化に關する研究を發表した人々は Max Sc-

heler, Pfänder, Geiger, Reinach, Stein, Walter, Kracauer 等である。そうして、其等の人々は全體上心と心との相互作用或は相互關係の見地から、社會の本質を究明せんとするものと認め得られるので、余は余の社會學を展開する上に、裨益される處少なくないのである。併し本論文に於て余の特に論究せんとするのは、社會學論と現象學との關係即ち現象學上から見て社會學は學問論的に如何に基礎附けられるかと云ふ問題であるから、本論文に於ては主として、其等の人々の中でも特に現象學的に社會學論を論じた人々の所説を考察するに止める。

今日は我國の哲學研究者間にありても、現象學或は現象學的哲學とは如何なるものであるかは、一般に知られて居ると思ふが、併し社會學、經濟學、法學等の研究者に對しては、かゝる哲學的知識の所有を前定して、直ちに社會學と現象學との關係を論ずると云ふ譯にはいかないと思ふ。それで余は先づ簡單に現象學とは如何なるものであるかを叙説して置きたいと思ふ。併し是れは決して容易な業でない。と云ふのは現象學なるものはまだ完成されて居ないからである。そうして今日現象學者と總稱される人々は、其の創說者たるフッサール氏の見地を大體上承認するとか、或は之れに共鳴するとか云ふぐらひなもので、重大なる諸問題に就ても、種々見解を異にして居る。是れ其等の人々の中には他の學派即ちオイッケンやヴントやリップスなどの學派から、轉じた人々が多いと云ふ事情から見ても察知されるのである。尙ほ最近には Heidegger 氏

などによりて、現象學は新しき方針に發展する傾向さへも認められるのである。

併しとにかくフッサール氏は今日の現象學の創設者であるので、吾人は現象學の何物たるかを理解せんとするに當つては、先づ同氏の説を研究せねばならぬ。又同氏の説の研究によりて吾人は現象學の一般の方針を、大體上理解することが出来るのである。ハイデッガー氏の新方針なるものも、勿論フッサール氏の説を離れて理解し得られるものでない。それで余は本論文に於て先づ現象學の一般的概念及び方針を究明せんとするに當つて、第一にフッサール氏の説を考察することとする。

フッサールの現象學

フッサール氏(Edmund Husserl, 1859—)の主要著作として今日までに公にされて居るものは、*Die Philosophie der Arithmetik* (1. Bd., 1891)、『*Logische Untersuchungen* (2 Bde. 1900 u. 1901)』*Ideen zu einer reinen Phänomenologie und Phänomenologischen Philosophie* (*Jahrbuch für Philosophie und Philosophische Forschung*, Bd. I. 1913)である。併し其の中で劃期的な著作として重要なのは「論理學的研究」と「現象學及び現象學的哲學考」とである。殊に同氏の現象學の稍々大成せる思想を研究する爲めに必要なるは後者である。しかも後者をよく理解する爲めには是非前者を

研究せねばならぬ。それで余も本論文に於ては、先づ前者の考察から出發して後者に進むことゝする。

併し其等の二著作に就て、フッサール氏自身の思想を十分明らかに理解し、そうして之を簡單に叙説すると云ふことは、甚だ困難な仕事である。是れ同氏はまだ其の理論を完成して居ない、否なまだ之を十分に自分の掌中のものとも、して居ないと思はれるからである。殊に「論理學的研究」は只豫備的研究に過ぎず、又「現象學及び現象學的哲學考」は現象學の一般的序論に外ならないものであるからである。(Walter Ehrlich, Kant und Husserl. Kritik der transzendentalen und der phänomenologischen Methode. 1923. S. 2 參考)。隨ふて吾人は其等の著作を熟讀して行く種種なる疑問が起り、又まだ成熟して居ないと思はれる幾多の思想に遭遇するのである。右に擧げしエアリヒ氏の新著はよく其等の點を指摘して居るので、フッサール氏の學說を批判的に考察せんとするものにござりては、甚だ有益なる著作であると思はれる。さはれ余は此處にフッサール氏の學說を批判的に論述せんとするのでなく、只先づ其の一般的意味及び方針、殊に社會學論の研究に直接觸れて居る方面を、考察せんとするだけであるから、其等の點に就ては後に社會學の現象學的基礎附けを評價する場合に譲ることゝする。そうして右の主旨から見て便宜上左の諸項に分ちて説述することゝする。

(1) 晩近哲學に於ける現象學の地位及び一般的主旨

純正論理學の觀念

(2) 純正論理學より現象學へ

現象學の概念

本質學と事實學

(3) 現象學的還元

一 現象學の地位及び一般的主旨

晩近哲學の主要なる諸方針との關係に於て、現象學の地位及び一般の方針を見定めて置く事は、其の根本的理解の爲めに肝要であると思ふが、先づ之を認識論的論理の方針の一種と認める事は一般に一致して居る點である。例へばモーグ氏は晩近哲學の諸方針を自然科學的、精神科學的、倫理的實際的、心理學的、論理的認識論的、及び形而上學的等の六方針に大別し、そうして現象學を論理的認識論の方針の一に數て居る。但し同氏は同方針を更に心理學的認識的論カント主義、批判的形而上學のカント主義、論理的實在論、內在哲學、基本學、先驗的觀念論、論理的價值論、現象學、及び對象論等に分つのである。(Willy Moog, Die deutsche Philosophie des 20. Jahrhunderts, 1922) 又ミユラー、フライエンフェルス氏は晩近哲學を先づ學の哲學及び學としての哲

學と、生の哲學及び生としての哲學との二大方針に大別して居るが、現象學を前者中の非カント的論理主義的體系の一と認めて居る。但し同氏は學の哲學の方針を更にマールブルヒ派の論理主義、バーテン派の價值論的先驗哲學、實在論への新轉向、感覺主義的實證主義、非カント的論理主義的體系等に區別するのである。(Richard, Müller-Freienfels, Die Philosophie des zwanzigsten Jahrhunderts in ihren Hauptströmungen. 1923) 尙ほ又メッサー氏は輓近哲學を先づ宗教的教會的哲學と合理主義哲學と非合理主義哲學との三大方針に大別し、そうして合理主義哲學を自然科学的に方向附けられたる哲學と、文化科學的に方向附けられたる哲學と、認識論的に方向附けられたる哲學とに別ち、現象學を認識論的に方向附けられたる哲學の一と認めて居る。但し同氏は認識論的方向の哲學を更に實證主義、プラグマチズムス、批判的觀念論、現象學的哲學、批判的實在論等に分つのである。(August Messer, Die Philosophie der Gegenwart. 1924)

右に述べし如く現象學は、今日の哲學的諸方針中先づ認識論的論理の方針に屬するものと、一般に認められて居るのであるが、併し同方針は又幾多の方針に區別されて居るから、吾人は更に現象學は其の一として他の諸方針から如何に區別され、又夫れと如何に關係するかを考究せねばならぬ。然らば上に述べしモーグ、ミユラー・フライエンフェルス、及びメッサーの三氏は、夫れ夫れ現象學と他の認識論的論理的諸方針との根本的差別及び關係を如何に考へて居るかと云ふ

に、先づモーグ氏は新カント派との類差を重要視して、以て現象學の一般の方針を指示せんとし、左の如く述べて居る。

「マールブルヒ派の代表者及び西南獨逸派の代表者は、共にカントに従ふて方針を立てる先驗的觀念論を遵奉すると云ふ點に於て一致して居るが、現代の哲學に於ける他の強大なる論理的認識論的一方針は、認識の先天的基礎に關する問題に於て、其等の新カント派哲學者と會合し、又觀念論的前定の上に立つて居るに拘らず、先天的なるものに到達する爲めには先驗的方法を排斥して、一の新しき方法即ち現象學的方法に従ふのである。(上掲の著書、SS. 248 ff. 249) 然るにミュラー・フライエンフェルス氏は新カント派の方針との差異を特に重要視して、以て現象學の一般的特質を決定せんとして居る。

「今や吾人は相互の間に於て如何に差異するとも、批判主義的立場を否定し、遙かに古い問題呈出から出發すると云ふことを共通點とする處の思想家の一團に達する。其等の思想家の中で現象學者の一團は殊に重要な地位を占めて居る。……現象學者の理想はつまり一切の心理學的混合から淨化されたる純正論理學、無制約的必然性を有する全く先天的なる一學問を建設することにある。然るに此の理想其物は設定されたる様に容易には實現され難く思はれるから、そこで現象學者は少なくとも其の理想に導く見込みあると認められる一の新しき方法論即ち

現象學を案出した。實に現象學者を總てのカント派の哲學者から區別する點は、カント派の哲學者が認識に於ける主觀的因素を大に強調すると云ふことである。此の主觀的因素はマールブルヒ派やバーデン派に於て見られる如く、非常に擴大され、實に絶對化されるまでにも至つて居る。然るに現象學者は客觀的なもの或は絶對的なものに達する一の直接な路を求めるので、彼等にありては一切の主觀的なものは「閉ぢ込められ」、對象を把握する「志向的作用」は個人の心理的結合から解放されて居る。現象學者は先天的なるものを、悟性の構成的、形成的行動として解するのではなく、之を先天的なるもの、吾人の概念から充分區別さる可き對象規定性として解するのである。(上掲の著書 S. 52. u. 53.)

そしてメッサー氏は、感覺的實證主義と先驗的觀念論とを、内部的に結び附けんとする一の企だてとして、現象學の一般的立場を見定めんとして居るので、同氏は簡單に左の如く述べて居る。

「マッハの實證主義にありては、感覺かくて直觀的なもの、そしてマールブルヒ派にありては、思惟かくて非直觀的な概念が、認識論的反省の中心點に置かれて居るが、現象學的哲學は直觀と概念との一の内部的結び附け(或は關係)を目標として努力して居る。(上掲の著書 S. 87.)

右に述べし三氏の見解に依て、現象學は今日の哲學的諸方針の間にありて如何なる地位を占めるものと、一般に認められて居るかは察知されると思ふ。そうして余は大體上メッサー氏の如くに見るのが、現象學の一般的地位及び主旨を理解する爲めに最も正當なる見解であると考へて居る。尙ほ現象學の立場とカント及び新カント派の先驗的觀念論の立場とは、一見すれば大に相異なれるものゝ如くに思はれる。そうして又フッサール氏自身も自分の方法は全く新しきものにして、カント流の先驗的方法とは甚だ相異なるものゝ如くに説かれて居る。我國の或留學生が同氏に面會せし際、カントの偏見を全然脱却しなければ自分の哲學を理解することが出来ない云云はれたとの事である。併し余は始めから同氏の現象學はさほどカントの立場と異なつて居るものであるかを疑ふて居た。又現象學は同氏の考へられる程新しきものであるかを疑ふて居たが、最近にカントの先驗哲學とフッサールの現象學的哲學との關係が重大なる一問題として詳しく研究されるに至つて、兩者の内部的關係の密接なるものであることが、段々明らかになつて來たと思ふ。又現象學なるものは、フッサール氏の主張される程新しきものでないことも、他の方面からの研究によりて明らかになつて來たと思ふ。併し余は此處に其等の問題を論究せんとするのではないから、只上に述べし如くに現象學の一般的地位及び主旨を簡單に表示するだけに止め、是れより同氏の最初の劃期的著作と稱せられる「論理學的研究」第一卷に於ける同氏の純正論理學の

觀念から考察し始めることとする。

二 純正論理學の觀念

「論理學的研究」第一卷「純正論理學序論」(Prolegomena zur reinen Logik)に於ては、フッサール氏は論理學に於ける心理主義を排斥することに最も多く力を盡くされて居るので、同卷の大部分は同問題を取扱ふて居るのである。併し此處では只同氏が、論理學を心理主義より全く淨化することによりて到達されたる純正論理學の觀念を、同卷最後の章即ち第十一章(Die Idee der reinen Logik)によりて述べるだけに止める。

夫れ學問ウィスセンשאフト或は學は先づ第一に思惟作用の統一であるが、今思惟作用に統一なる對象的關係を與へ、又此の統一性に於て觀念的妥當性を與へるもの、或は觀念的に學的思惟を貫徹して之れに、隨ふて又學に統一性を與へるものは、一定の客觀的或は觀念的結合(ein gewisser objektiver oder idealer Zusammenhang)である。然るに此の客觀的結合は二重の意味に解し得られる。夫れは一方に於ては實質或は物件の結合 der Zusammenhang der Sachen (夫れに思惟體驗は志向的に結び附く)を意味し、他方に於ては真理の結合 der Zusammenhang der Wahrheiten (夫れに於て實質的統一はあるがまゝで客觀的妥當に達する)を意味する。兩者は相共に先天的に與へられ、

相互に不可離的である。併し此の明證的不可離性は同一性でない。夫れ夫れの眞理或は眞理結合に於て、夫れ夫れの實質及び實質的結合が表現される。併し眞理結合は夫れに於て「眞實」である處の實質の結合とは異なるものである。眞理に就て妥當する眞理は、其の眞理の中に置かれたる實質に就て妥當する眞理と合致しない。相互に他から切り離しては只抽象的にのみ考へらる可き此等二つの統一、即ち對象の統一と眞理の統一とは、判斷に於て、或は一層詳しく云へば認識に於て吾人に與へられる。

認識結合に觀念的には眞理の結合が相應する。眞理の結合は只眞理の複合であるだけでなく、更に複合的眞理である。かくて複合的眞理は當然、しかも全體として、眞理の概念中に包括される。又統一されたる眞理と云ふ意味で、諸學問も眞理の概念に屬する。そうして眞理と對象性との間に成立する相關關係によりて、同一の學に於ける眞理の統一に、一の統一的對象性が相應する。夫れは學範域の統一である。そうして同一の學の一切の個別眞理は、其の學範域に結び附けられるから、實質的に相屬すると云はれるのである。

此處に學の統一、かくて又範域の統一を規定するものは、何であるかと云ふ問題が起る。是れ諸眞理を一の眞理團に集合しさへすれば、夫れで學が成立すると云ふのではないからである。眞理團は全く一の外部的な結合に過ぎないことがあり得る。然るに學の成立には基礎附け結合の一

定の統一が本質的に必要である。尙ほそう考へるだけでは充分でない。更に基礎附けの統一の如何なる種類のものが、學を確定するかを考察せねばならぬ。

夫れ學的認識とは理由グレン或は根據からの認識である。そうして或物の理由を認識すること云ふは、即ち夫れがかくかくにあること或は行動することの必然性を觀破することである。真理の客觀的實位グレイカとしての必然性は、夫れに應ずる實質關係の合則的妥當性と同じ意味のものである。そうして真理は個別的と一般的とに別れる。個別的真理は個別的個體の現實的存在に關する主張を含むが、一般的真理は全くかゝる主張を離れ、只個體の可能的存在(全く概念から見て)を推知することを許すだけである。

個別的真理はあるがまゝでは偶然的である。吾人が其等の真理に就て理由からの説明を云々する時には、夫れは一定の前定されたる事情の下に於ける其等の真理の必然性を證明することを意味するのである。即ち一の事實と他の事實との結合が合則的結合であるならば、其等の事實の實在は其の結合を規制する法則に基づき、又適當なる事情の前定の下で、必然的實在として規定されたのである。併し事實的真理の基礎附けでなく、一般的真理の基礎附けを取扱ふ時には、吾人は一定の一般的法則(特殊化及び演繹的推理によりて、基礎附けらる可き命題を產出する處の)に導かれる。そうして一般的法則の基礎附けは必然的に、其の本質上最早基礎附け得られない一定

の法則に到着する。そうして其等の法則は原則グレンデゼツェと稱せられる。

最後の理由或は根據として一の原則性に基き、又其の原則性から組織的演繹によりて發展する諸法則の、觀念的に完結されたる一全體の組織的統一は、組織的に完成されたる理論テオリーの統一である。此の場合原則性は一の原則から成立するか、又は同質的諸原則の一團から成立するかである。そうして吾人はかゝる嚴格なる意味での理論を一般的算術、幾何學、分析力學、數學的天文學等に於て見出すのである。普通に人々は理論の概念を一の相對的或は關係的なもの、即ち夫れによりて支配され、又夫れが説明的理由を加へる處の個體の多數性に關係するものとして解する。併し説明的任務を行なふ可能性は、余輩の解する絶對的意味の理論にありては、其の本質の自明的一結果である。

余輩は尙ほ次の差別に注意して置きたい。即ち總ての説明的結合は一の演繹的結合であるが、併し總ての演繹的結合は説明的結合であるのではない。一切の理由グレンデは前提であるが、併し一切の前提は理由であるのではない。實に各演繹は一の必然的なもの、即ち法則に従ふものである。併し結論(斷案)が法則に従ふて生ずると云ふことゝ、夫れが法則から生じ、そうして法則に於て確立されると云ふことゝは同一でない。

以上述べ來りし處によりて、余輩はさきに提出せる問題、即ち一の學の眞理の相屬性を規定す

るもの、其の實質的或は物件的統一性を決定するものは、何であるかと云ふ問題を解決し得ると思ふ。夫れ統一する原理は二種のものであり得る、即ち本質的なものと及び本質外的なものであり得る。一の學の諸真理は、其の連結が先づ第一に學を學たらしめるもの、即ち理由からの認識、かくて説明或は基礎附エクスプレッショナル・ファンダメンタルげに基づくならば、本質的に統一されて居る。かくて一の學の本質的統一とは即ち説明の統一である。然るに一切の説明は一の理論に依頼し、其の終結を原則即ち説明原理の認識に於て見出す。かくて説明の統一とは理論的統一即ち基礎附ける合則性の同質的統一、最後に説明原理の同質的統一を意味するのである。此の部類の諸學は抽象學と總稱されて居るが、夫れはあまり適當でない。そうして之を理論學と稱するは本來最も適當である。併し此の語は一般に實際的及び規範的學に對立させて用ひられて居る。尙ほ此の部類の諸學は、法則に於て其の統一原理并に其の本質的研究目標を認める以上、吾人は之を適當に法則學 (Nomologische Wissenschaften) と稱することも出来る。更に説明學と云ふ語も、説明其物でなく、説明からの統一を強調する意味に用ひられる時は適當である。

併し更に諸真理を一の學に結合し調整する爲めに用ひられる、本質外的なる諸見地がある。此處に先づ第一に余輩は普通の意味の物件或は事實の統一をあげる。即ち其の内容に従ふて同一の個別的對象性或は同一の經驗的類カテゴリーに結び附けられる一切の真理が、相連結されることである。是

れ具體學と稱せられるものにして、例へば地理學、歴史、星學、博物學、解剖學其他の學の如きものである。地理學の眞理は地球との關係によりて結合され、氣象學の眞理は地球の氣象現象に關するものである。

此等の學は又記述學とも稱せられるが、記述の統一が對象或は部類ゾッパレの統一に依て規定される以上、此の名稱は正當に用ひ得られる。併し記述學は只記述のみを目的とするもの、如く解してはならぬ。尙は經驗的統一に與へられる説明は、遙かに相距たれる處の、或は全く異質的である處の諸理論或は諸理論學に關係すると云ふことがあり得るので、かくて吾人は具體學を本質外的學と稱してもよいのである。

今抽象學或は法則學は本來の基本學にして、そうして其の理論的財産からして具體學は夫れを學たらしめる總てのもの、即ち理論的なものを引き出すのである。但し理論的關心は唯一の價值規定的關心でなく、又特別な價值規定的關心でもないので、審美的、倫理的、廣義の實際的關心等も同様に個體的なるものに結び附け得られ、又其の個別的記述及び説明に最高價值を與へ得るのである。併し純理論的關心が規定的である以上は、個別的個體及び經驗的連結は夫れ自身では何物をも意味しない、或は一般的理論の構成に對して只方法論的通過點として意味を有するだけである。

終りに余輩は尙ほ學的統一の他の本質外の一原理を擧げねばならぬ。夫れは統一的評價關心から生じ、かくて一の統一的な基本價值或は一の基本的規範に依て、客觀的に規定するものである。かくて此の原理は規範的諸學科に於て、眞理の物件的（實質的）相屬性或は範域の統一性を決定する。確かに吾人は物件的相屬性と云ふに於ては、最も自然に、物件或は實質其物に基づく相屬性を意味するであらう。かくて吾人は此場合には只理論的合則性からの統一か、或は具體的物件の統一かのみを、頭裡に有するであらう。此の把握に於て、規範的統一と物件的統一とが相對立して現はれてくるのである。尙ほ規範學も一定の仕方にて理論學に依存するので吾人は、矢張り左の如く云ふ事が出来る。即ち規範學は夫れに於て學問である處の總てのもの、まさしく理論的なものを理論學から引き出すのである。

以上論述せる處によりて、「學の統一性」の問題は大體上解決されたと思ふが、そこで余輩は更に進んで「學一般の可能性の條件」は何であるかと云ふ、重大なる問題を呈出する。然るに學的認識の本質的目標は、只嚴密なる意味に解する法則學の理論によりてのみ、到達し得られるものであるから、右の問題は更に「理論一般の可能性の條件」は何であるかと云ふ問題に改められねばならぬ。處で理論はあるがまゝでは眞理から成立し、そうして其の連結の形式は演繹的形式であるから、かくて余輩の問題の答解は、一層一般的なる問題の答解、即ち眞理一般の可能性の條件、

更に演繹的統一性一般の可能性の條件に關する問題の答解を含むのである。

併し此處に先づ余輩の問題を、尙ほ一層詳しく決定して置くことが必要と思ふ。今余輩の問題は先づ主觀的な意味に於て解される。そうして其の意味に於ては、該問題は理論的認識一般の可能性の條件、一層一般的に云へば推理一般及び認識一般の可能性の條件に關する問題として、よりよく云ひ表はれる。處で其等の條件は一部分は現實的或は實在的にして、一部分は觀念的或は理想的である。併し余輩は此處では只觀念的條件のみを考察する。然るに其等の觀念的條件は更に二種に區別され得る。即ち夫れはノエチッセ (Noetische) であるか、即ちあるがまゝの認識の觀念に基づくもの、實に先天的なるもの（心理的に制約される人間の認識作用の經驗的特殊性を全く願みないもの）であるか、又は純論理的であるか、即ち全く認識の内容に基づくものであるか。

前者に關しては、例へば思惟する主觀は理論的認識が實現される總ての種類の作用をなす能力を有たねばならぬことは、先天的に明白である。殊に吾人は思惟するものとして、真理としての命題、及び他の真理の歸結としての真理を洞見する能力、更にあるがまゝの法則、説明する理由或は根據としての法則、最後の原理としての法則等を、洞見する能力を有たねばならぬ。併し他の方面に於ては又真理其物及び特殊的法則、理由、原理等は、吾人が洞見すると否などを問はず、

あるがまゝに存する事は明確である。そうして其等のものは、吾人が之を洞見し得る限り妥當するのではなく、只妥當する限りに於てのみ、吾人が之を洞見し得るのであるから、其等のものは其等のものゝ認識の可能性の客觀的或は觀念的條件と見做されねばならぬ。それよりしてあるがまゝの眞理、あるがまゝの演繹及びあるがまゝの理論に屬する先天的法則は、認識一般の可能性、或は演繹的及び理論的認識一般の可能性の觀念的條件、實に全く認識の「内容」に基く條件を表現する法則として、特質附けらる可きである。

明かに此處では、先天的認識條件が取扱はれて居るので、夫れは思惟主觀及び主觀性一般の觀念との一切の關係から切り離して考察し研究し得られる。上述の諸法則は實に其の意義内容に於てはかゝる關係から全く解放されて居る。併し云ふまでもなく、此等の法則は自明的な轉向或は屈折をなし得る、そうして夫れに依て認識及び認識主觀との明瞭なる關係を獲得し、更に認識作用の現實的可能性に就てさねも言明する。此處に現實的可能性に關する先天的主張は他の場合に於ける如く、觀念的關係を経験的個別場合に移す事に依て生ずるのである。そうして余輩がノエチッセ(認識的)條件として客觀的論理的條件から區別した觀念的認識條件は、根本的には、純認識内容に屬する其等の法則的洞見の右の轉向(夫れに依て其等の洞見はまさしく認識の批判に、又夫れ以上の轉向に依て認識の實際的論理的規範化に對して有効となる)に外ならない。

右の考察から見れば、認識一般の可能性、殊に理論的認識の可能性の觀念的條件に關する問題に於て、吾人は結局一定の法則（全く認識の内容に、或は夫れが從ふ範疇的概念に基づき、そうして認識主觀の作用としての認識に就ては、最早何物をも保有しない程抽象的な法則）に到着するのである。そうしてまさしく其等の法則或は之を築き上げる範疇的概念が、今客觀的觀念的意味にて、理論一般の可能性の條件と解し得られるものを形成するのである。是れ實に理論的認識に關してのみならず、更に又其の内容に關しても、かくて直接に理論其物に關しても、可能性の條件の問題が呈出され得るからである。そこで余輩は、理論とは眞理や法則などと同じく、可能的認識の一定の觀念的内容であると解する。そうして同一内容の個別的認識作用の多樣に、まさしく此の觀念的に同一なる内容として、一の眞理が對應すると同様な仕方にて、個別的認識複合（其の各々に於て、今又は他の時、此の又はかの主觀に於て、同一の理論が認識に達する處の個別的認識複合）の多樣に、まさしく此の理論が概念的に同一なる内容として對應する。されば理論は作用からでなく、純觀念的要素即ち眞理から、更に純觀念的形式、理由と歸結との形式に於て、築き上げられるのである。

今可能性の條件の問題を、直接に右の客觀的意味の理論、實に理論一般に結び附けて考へると、此の可能性は純概念的に考へられたる其他の事物オブジェクトに於て有する意味よりは、他の何等の意味を

も有し得ない事が學ばれる。そこで吾人は事物から概念に引き戻される。そうして「可能性」とは關係する概念の「妥當性」或は「本質性」を意味するものに外ならぬ。是れ屢々概念の想像性或は無本質性に對立させて、其の「實在性」と稱せられたものである。此の意味にて人々は、定義された概念の可能性、妥當性、實在性を保證する實在的定義なるものを云々して居る。併し概念に適用されるに於ては、可能性と云ふことは其の遷移によりて明らかに曖昧になる。嚴密に云へば關係する概念に攝取される對象の存在が可能であるのである。そうして此の可能性は、例へばかゝる對象の直觀的表象に基いて吾人に表示される處の概念的本質の認識によりて、先天的に保證されるのである。併し概念の本質性は遷移によりて又可能性とも稱せられるのである。

以上述べしことに結び附けて考へると、理論一般の可能性并に夫れが依存する條件に關する問題は、一の理解し易き意味を與へられる。理論一般の可能性或は本質性は、何れかの一定の理論の洞見的認識によりて、自から確かめられるのである。併し更に左の問題が起るであらう。即ち何が理論一般の此の可能性を、觀念的合則的普遍性に於て制約するか。かくて何があるがまゝの理論の觀念的「本質」をなすか。理論の「可能性」が構成される原始的諸可能性(die primitiven Möglichkeiten)は何であるか。理論の夫れ自身本質的な概念が構成される原始的本質的概念は何であるか。それより更に左の問題が起る。即ち其等の原始的概念に基づきて、あるがまゝの一切の

理論に統一性を與へる純粹法則は何であるか、かくてあるがまゝの一切の理論の形式に屬し、其の可能的(本質的)變化或は種類を、先天的に規定する法則は何であるか。

今其等の觀念的概念或は法則が、理論一般の可能性を限定し、理論の觀念に本質的に屬する處のものを表示するとすれば、總て理論と云はれるものは只夫れが其等の概念或は法則と調和するに於てのみ、又調和する限りに於てのみ、理論であるといふことが直ちに承認される。一の概念の論理的辯明即ち其の觀念的可能性の辯明は、其の直觀的な或は演繹し得られる本質に遡ることによりて成就される。かくてあるがまゝの與へられたる理論の論理的辯明は、其の形式の本質に遡ること、隨ふて其等の概念及び法則(理論一般の觀念的構成要素となる處の、そうして理論觀念の其の可能的諸種類に於ける一切の特殊化を、先天的に又演繹的に規制する處の)に遡ることを要求する。此處に演繹の廣い範域に於けると、例へば單一なる推論式に於けると、全く同様な關係が認められる。推論式は夫れ自身に於て、洞見によりて闡明され得るが、しかも其の最後の又最深の辯明は、形式的推論法則に遡ることによりて、始めて與へられるのである。そうして夫れによりて實に推論式的結合の先天的理由の洞見が生ずる。まさしく同様な關係が總ての複合的演繹に於て、殊に理論に於て認められる。吾人は洞見的な理論的思惟に於て、説明されたる眞相の理由(根據)の洞見に達するのである。そうして此の思惟の理論的内容をなす處の理論的結

合其物の本質の深い洞見、及び其の作業の先天的法則根據の深い洞見は、形式及び法則、並に其等のものが屬する他の認識層の理論的結合に遡ることによりて、始めて獲得されるのである。

却說以上論述し來れる處の、一の先天的學科としての純正論理學の觀念の豫備的決定に基いて、更に其の任務と認めらる可きもの、一般を考察したいと思ふが、今純正論理學の任務或は問題は三部類に大別される。其の一は純意義範疇、純對象的範疇及び兩者の合則的複合化の確定にして、其の二は其等の範疇に基づく法則及び理論、其の三は可能的理論諸形式の理論或は純正多樣性論 (die Theorie der möglichen Theorienformen oder die reine Mannigfaltigkeitslehre) である。

今純正論理學が先づ第一に取扱ふ可きは、客觀的關係に於て認識の結合、殊に理論的結合を「可能ならしめる」處の重要な、殊に總ての原始的概念を確定すること、或は學的に説明することである。換言すれば理論的統一の觀念を構成する概念、或は又之れと觀念的合則的關係に立つ概念が考察さる可きである。明らかに此處に第二段の構成的概念、即ち概念及び其他の觀念的諸統一の概念が現はれて來る。與へられたる理論は、與へられたる諸命題の一定の演繹的連結であるが、更に其等の命題其物は又與へられたる概念の、一定の仕方で規定されたる連結である。理論の特有「形式」の觀念は、其等の與へられたものに對して、「規定されないもの」を取り替へるところから生ずるので、かくて概念及び他の觀念の概念が卒直な概念に代る。そうして概念、命題、

真理等の諸概念は之れに屬する。

云ふまでもなく元素的連結形式の概念は構成的である。殊に命題の演繹的統一に對して全く一般的に構成的である處の元素的連結形式の概念はそうである。更に下位の意義要素を單一なる命題に結合する諸形式も亦同様である。そうして夫れは更に種々なる主位形式、賓位形式、接合的及び選言的結合の形式、複數形式其他に導く。然るに原始的形式から益々新しき形式の無限的多様が、依て以て產出される其等の漸進的複合化は、確實なる法則によりて規制される。そうして原始的概念及び形式に基いて派生し得る概念の結合的總觀を可能ならしめる其等の複合化の法則、及び其の結合的總觀其物も、亦純正論理學の研究領域に屬する。

右に舉げし諸概念即ち意義範疇と密接な、觀念的に合則的な關係に立ち、又其等の概念と相關する處の他の諸概念がある。夫れは對象、真相 (Sachverhalt)、純一性、數多性、量、關係、連結等の諸概念にして、純正或は形式的對象範疇である。此等の諸概念も亦純正論理學に於て考究されねばならぬものである。此處に意義範疇の方面にありても亦對象的範疇の方面にありても、認識質料の特殊性から獨立する處の、そうして思惟に於て特殊的に現はれる總ての概念及び對象、命題及び真相等が依て以て調整されねばならない處の諸概念が取扱はれる。されば其等の概念は只種々なる「思惟機能」に關してのみ發現するのである、即ち只あるがまゝの可能的思惟作用に於

て、或は夫れに於て把捉され得る相關者に於てのみ、其の具體的基礎を有し得るのである。

今純正論理學は總て其等の概念を確定し、其の「起源」を一々探究す可きである。併し夫れは全く心理學的方面から離れて考察するのである。純正論理學は其等の概念の現象學的起源、詳しく云へば其等の概念の本質の洞見、又方法的關係に於ては一義的な鋭く區別される語意義の確定を取扱ふのである。そうして吾人は只充當的觀念化インテンスイフエーションに於て、本質を直覺的に實現することによりてのみ、或は複合的な概念に於ては夫れに内在する元素的觀念の本質性の認識、及び其等の元素的觀念の連結形式の觀念の認識によりてのみ、右の目標に達し得るのである。

純正論理學の取扱ふ第二の問題部類は、右の二種の範疇概念に基づく處の、そうして只其等の概念によりて把捉されたる理論的諸統一の複合化及び改變的更新の可能的形式に關するだけでなく、寧ろ發展する形成形式ビルドアップ・フォームの客觀的妥當性に關する法則、かくて一方に於ては全く其の範疇的形成形式に基いて考察される意義一般の眞或は偽、他方に於ては矢張り其の純範疇的形式に基いて考察される對象一般、眞相一般の實在性及び非實在性に關する法則の探究に關するものである。そうして其等の法則（論理的範疇的であるが故に、考へ得られるだけ最大なる普遍性に於て意義一般及び對象一般の上に行はれる法則）は自から更に理論を構成する。一方即ち意義の方面に於ては、推理の理論が成立し、他方即ち意義の相關者、對象の方面に於ては、數多性の概念に基い

ディライチ・フィル・ハイウェー
て純數多論、量の概念に基いて純量論などが成立する。されば總て其等の法則は、原始的法則或は原則の限られたる數に歸着するので、そうして其等の原則は直接に範疇的概念に根さじ、個々の理論を相對的に完結せる成分として包含する一の包括的理論を、確立せねばならないのである。

此處に、總ての可能的意義及び總ての可能的對象を包括する其の形式的普遍性によりて、各特殊の理論及び學を支配する處の、又各特殊の理論及び學が妥當する以上従はねばならぬ處の、諸法則の世界が認めらる可きである。併し各個別的理論は其の可能性及び妥當性の根據として、其等の法則の各々を前定すると云ふのでなく、寧ろ其等の範疇的理論及び法則は其の觀念的完成に於て、包括的基本を作り、夫れから各妥當的理論は其の形式に特有なる其の本質性の觀念的根據を引き出すのである。理論は個々の眞理及び結合から作られる一の包括的統一である以上、眞理の概念、及び此の又はかの形式の個々の結合の可能性に屬する諸法則は、限定されたる範域中に結束されることは自明的である。理論の概念はより狭いものであるとは云へ、或は寧ろそうであるが故に、其の可能性の條件を探究す可き任務は、眞理一般及び命題結合の原始的形式に相應する任務に比して、一層包括的なものである。

總て上述の研究が終了すると、理論一般の可能性の條件の學の觀念は、充分に決定されたと云

ひ得られる。併し吾人は直ちに、此の學は其の上に立つ處の一の補充する學に依存することを見る。そうして其の補充する學と云ふは、即ち諸理論の本質的種類(形式)并に夫れに屬する關係法則を先天的に取扱ふものである。かくて總てを統括して、其の基本的諸部分に於て、理論の觀念に構成的に屬する本質的觀念及び法則を研究し、夫より理論の觀念を分化すること、及びあるがまゝの理論の可能性でなく可能的諸理論を、先天的に研究することに移る處の、理論一般の一の包括的學の觀念が發達するのである。

さきに舉げし諸問題の充分なる解決に基いて、純範疇的概念から可能的諸理論の多様な觀念、理論の純諸「形式」(其の本質性が合則的に證明されたる)を明確に形成することが可能となる。併し此等の諸形式は相互に無關係ではない。吾人が依て以て可能的諸形式を構造し、其の合則的結合を總觀し、かくて又變化によりて規定する或基本因素を他の基本因素に移し得る方法の定まれる順序があるであらう。一般的ではないが、しかも理論諸形式に對して明確に定義される諸類、即ち限定されたる範圍内に於て、諸形式の相互的發達、連結及び轉化を支配する普遍的命題があるであらう。

此處に設定さる可き命題は、第二部類の理論の原則とは、例へば推論式法則や算術的法則などとは、明らかに異なる内容及び性質を有するもので、あらねばならぬであらう。さはれ他方に於ては、其等の命題の演繹は全く其等の理論に基づかねばならぬことは、始めから明白である。

右に述べしことは理論一般の一の理論學、純正論理學の最後の又最高の一目標である。

却說以上論述せる處によりて大體上明確に規定されたる純正論理學の概念は、理論の觀念に本質的に結び附けられる諸問題の、理論的に完結せる一區域を意味する。如何なる學も理由からの説明なくは、かくて理論なくは可能でない以上、純正論理學は最も普遍的なる仕方にて、學一般の可能性の觀念的諸條件を包括する。併し他方に於ては、かくの如くに把握されたる論理學は、夫れが爲めに決して經驗學一般の觀念的諸條件を、特殊の場合として夫れ自身の中を含むものでないことが注意さる可きである。其等の條件に關する問題は、確かに一層制限されたる問題である。經驗學も亦學である。そうして云ふまでもなく其の理論的内容に於て、上に限定せる領域の法則に従ふ。併し觀念的法則は經驗學の統一を、單に演繹的統一の法則の形式に於て規定するのでない。是れ經驗學は其の單なる理論に還元さる可きものでないからである。例へば理論的光學即ち光學の數學的理論は、光學の全體でなく、數學的力學は力學の全體でないのである。しかも經驗學の理論が生長し、又夫れが屢々學的進歩の進行中變化される認識過程の複雑なる全裝置は、常に經驗的法則に従ふのみならず、更に觀念的法則にも従ふのである。

經驗學に於ける一切の理論は、單に假定されたる理論である。夫れは洞見的に確實なる原則からの説明を與へるのではなく、只洞見的に蓋然的なる原則からの説明を與へるだけである。かくて其等の理論其物は只洞見的蓋然性を有するだけのもの、只一時的な理論に外ならずして、終局的

な理論でない。同様なことは、理論的に説明さる可き事實に付ても或度に於て云ひ得られる。吾人は其等の事實から出發し、其等の事實は與へられたるものとして吾人に妥當し、そうして吾人は之を單に「説明」せんとする。併し吾人は説明的假説に上り、之を演繹及び徵驗によりて蓋然的法則として承認するに當つては、事實其物も亦全く變化せずに存續するのではない。事實も亦進行する認識過程に於て變化するのである。有效と認められる假説の認識増長において、吾人は現實的實在の「眞實本質」に益々深く入り込む。事實は吾人に對しては、原本的には只知覺の意味に於て（又同様に記憶の意味に於て）「與へられて」居る。知覺に於ては物及び過程は、ダイナミゼント、フォルメン恐らく夫れ自身で吾人に現はれる。云はゞ吾人は之を障壁なしに觀照し把握する。そうして吾人が其處で直觀するものを、知覺判斷に於て云ひ表はす。知覺判斷は學の先づ第一に「與へられたる事實」である。併し吾人が眞實なる事實眞相に就て知覺現象に認めるものは、認識の進歩中變化する。直觀的に與へられたる物（第二次的形質）の物）は只「單なる現象」として妥當する。そうして其等の物に於て、眞なるものは何であるかを決定する爲めには、換言すれば認識の經驗的對象を規定する爲めには、吾人は此の客觀性的の意味に適合する一の方法、及び之れによりて獲得さる可き（そうして進歩的に擴大さる可き）學的法則認識の一範域を要する。

併し客觀的經驗學の總ての經驗的方法に於ては、既にデカート多びライブニッツの認識せる如く、一の心理學的偶然が支配するのでなく、一の觀念的規範が支配するのである。余輩は説明法

則の評價及び現實なる事實の規定に於て、そうして實に學の到達されたる各階段に對して、其の時其時に只一の正當なる態度があるだけであると主張する。新しき經驗的事實の現はれることによりて、一の蓋然的法則或は理論が維持され難いことが明らかになることも、夫れからして余輩は其の理論の學的基礎附けが謬つて居なければならなかつたとは推斷しない。以前の經驗の範域に於ては以前の理論が唯一の正當なる理論であつたので、そうして擴大されたる經驗の範域に於ては新たに基礎附けらる可き理論が、唯一の正當なる理論である。夫れは正當なる經驗的考慮によりて辯明確立さる可き唯一の理論である。之れに反する場合には、吾人は恐らくは經驗的理論は正當に基礎附けられて居ないと判斷する。(たとひ夫れが經驗的認識の與へられたる狀態に於ては、唯一の適當な理論であることが、恐らくは他の客觀的に正當なる方法によりて明らかに證示されることも)。かくて左の事が推斷さる可きである。即ち經驗的思惟の範域、蓋然性の範域に於ても、經驗學一般の可能性、現實的なもの、蓋然性認識の可能性が、依て以て先天的に基礎附けられる觀念的要素及び法則があらねばならぬと云ふことである。此の純法則性の範域(理論の觀念、及び一層一般的に眞理の觀念とは關係を有しないが、併し經驗的説明統一の觀念、隨ふて蓋然性の觀念と關係を有する範域)は論理的技術論の第二の大基礎をなし、そうして夫れに應じて廣く解さる可き意味に於て、純正論理學の範域に屬するものである。

却說フッサール氏が其の名著「論理學的研究」第一卷「純正論理學序論」に於て論述されて居る純

正論理學の觀念は、以上述べしが如きものである。余は始めには只極簡單に其の概要を述べるだけに止めたいと思ふて居たが、併し同氏の現象學の觀念を理解する爲めには、先づ同氏の純正論理學の觀念をよく理解して置くことの甚だ肝要なるを感じ、比較的に詳しく述べることにしたのである。尙ほ其の中に論述されて居る同氏の學の分類論は「純正現象學及び現象學的哲學考」に於ける學の分類論を理解する準備として、重要な意味を有すると思ふから、讀者が特に注意されることを望む。

今フツサル氏は「論理學的研究」第一卷に於て、純正論理學の觀念を右の如くに決定されたことすれば、次に同氏の進む可き途は、其の觀念を展開し發展して以て、純正論理學の體系を建設することである可きである。されば同書第二卷は、當然同氏の純正論理學體系を論述するものと豫期されて居たのであるが、然るに同卷が刊行された時には、そうでなかつたが爲めに失望した人々もあつたが、併し同卷に於て同氏の現象學の觀念が始めて詳しく論述されて居るので、今日の哲學界の状態から見れば、同卷は一の重大なる意味を有するものである。然らば同氏が「論理學的研究」第一卷に於て純正論理學の觀念を規定した後、直ちに其の體系の建設に進まず、其の認識論的準備及び開明に必要であるとして、更に現象學なるものを立てんとしたのは、如何なる理由によるか。又同卷に於ける現象の概念は如何なるものであるか。余は先づ此等の問題を研究した後、「純正現象學及び現象學的哲學考」に於ける現象學の新概念の研究に入りたいと思ふ。